

# 読むことと詠むこと

斎藤美衣

現代歌人協会の公開講座に参加した。今年

のテーマは、「現代歌人協会賞受賞歌集を読む」。初回の四月は吉川宏志『青蟬』を石川美南が、二回目の五月は、大滝和子『銀河を産んだように』を佐藤弓生が解説した。

一首を前にして、優れた読み手が丁寧なその歌を読み解く。普段どのように一首を読んでいるかの過程を、聞き手に開示してくれているようだ。以前東京歌会で、高野公彦が「歌会では、自分の歌がどう批評されたかではなく、他の人の歌に他の人がどう批評するかをよく聞くとよい」と発言したことがあり、この言葉は批評会や歌会に参加するときのわたしの指針であり続けている。

先日の「大滝和子『銀河を産んだように』を読む」では、次のような読みが示されていた。

サンダルの青踏みしめて立つわたし銀河を産んだように涼しい

大滝和子『銀河を産んだように』

視点が多くに行ったり、近くに行ったりする歌の作りである。遠いのに身体に近い感覚

がある。

収穫祭 稜線ちかく降り立ちて Dp  
tween や up や away を摘めり

ここで出てくる英単語は一つで意味が成立する名詞ではなく、自立していない言葉である。そんな自立していない言葉への関心があり、そこに詩がある。

優れた読みを聞くと、自分の読みがぐんと広がる。読み手としての幅やリテラシーが向上すれば、歌集を読む時間や行為はより豊かなものとなる。

吉川宏志は、短歌時評集『読みと他者』の中で次のように書いている。

「小高は、現在の批評が、好悪に偏り、内部に閉じたものになっているという。それを脱するには、過去の作品の比較や、他のジャンルとの比較が行われなければならない。そうした姿勢を『公共性の自覚』と呼び、個人の好みだけを大切にするのはなく、もっと広い視野から短歌をとらえ、考え方の違うものどうしで、活発に議論を戦わせるべきだと主張した」

日本の中でたのしく暮らす 道ばたでくちやくちやくの雪に手をさし入れる

永井祐『日本の中でたのしく暮らす』

この一首について、絶望感の中であえて「たのしく暮らす」と言わねば生きられない若者の姿が表現されたものとして歌を評価する傾向に、小高賢は疑念を述べたという。

二年半前から、仲間内で月に一度歌集の読書会を行なっている。先日の読書会でこの歌が話題になった。

ひとつ蝶二つに割れてふたつ蝶六つにわかれて仏間しげし

有川知津子『ポトルシップ』

蝶が二つに割れ、それが今度は六つに割れるイメージはどこからくるのかという議論があった。子孫が累々と増えていくさま、蝶の羽の模様から蝶が増えるイメージがあるなどの意見があった。読みのなかで立ち止まる箇所の違い、着眼点の違いを感じた。

わたしが心はずっと留めているよい歌を作るためのアドバイスは、「よい歌集をたくさん読むこと」だ。わたしはそれに加えて「よい読みをたくさん聞くこと」を挙げたい。よい歌を作るためには自分の歌の土壌を育てねばならない。読みと詠みは、両輪のような関係なのだ。